

# 小学生が必要と感じている学習支援の現状と課題

—児童及び教員へのアンケート調査の結果より—

中村 綾・石川由美子

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要 第10号 別刷

2023年8月31日



# 小学生が必要と感じている学習支援の現状と課題<sup>†</sup>

—児童及び教員へのアンケート調査の結果より—

中村 綾\*・石川由美子\*\*

大田原市立西原小学校\*

宇都宮大学共同教育学部\*\*

本研究では、那須地区の中規模校A小学校の3年生以上の児童と同校の教職員を対象にアンケート調査を行い、得られたデータを考察して、児童が実際に感じている学習面での困り感と教師の支援の現状と課題、今後必要と考えられる支援について明らかにした。「読むこと」「書くこと」「計算すること」では、それぞれの学年により課題があることが分かった。また、高学年になるほど「授業に興味をもてない」、「内容の理解が難しい」と感じている児童が増えていることが分かった。一方で、児童には学年を問わず、自分で問題を解決しようとする姿勢が見られることも明らかになった。児童のつまずきの原因を理解し適切な支援を行うためには、教師の専門性、人員と教材研究の時間の確保、保護者との信頼関係づくりなどが必要であることが見いだされた。

キーワード：学習支援、小学校、読むこと、書くこと、計算すること

## 1. 問題と目的

文部科学省の中央教育審議会答申（2021）では、「2020年代を通じて実現を目指す学校教育『令和の日本型学校教育』の姿を、『全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現。』と、示している。一方、現場では年々多様な子どもたちへの対応が苦慮されている中、「全ての子供たちの可能性を引き出す」授業の在り方の探求が急務であると感じている。

さらに文部科学省初等中等教育局特別支援教育課（2022）では、「通常学級に在籍する小中学生の8.8%に発達障害の可能性がある」ことが明らかになり、

10年前の調査と比較して、2%以上増加していることが大きな話題になった。しかし、小学校では学年が上がるほど、「学習面で著しい困難を示す」児童の割合が低くなっている（通常学級の担任教師の回答）。これは、小学校の現場での実感とは異なるものだと感じた。

このように感じる中で、通常学級における学習支援をさらに充実させるためには、何が課題で何が必要なのかを見極め、支援の改善策を立てていく必要があると考えた。

そこで、本研究では那須地区の中規模校A小学校の3年生以上の児童と同校の教職員を対象に、学習支援や困り感に関するアンケート調査を行い、得られたデータを考察して、学習支援における現状や課題について明らかにすることを目的とする。

## 2. 方法

### (1) 調査対象

那須地区A小学校（中規模校）の学級担任（特別支援学級等を含む）及び3学年以上の全児童を対象とした。

<sup>†</sup> Aya NAKAMURA\*, Yumiko ISHIKAWA\*\*:  
The Current Status and Issues of Learning Support That Elementary School Students Need -From The Results of a Questionnaire Survey of School Children and Teachers-  
Keywords: Learning-Support Method, Elementary School, Reading, Writing, Calculate  
\* Nishihara Elementary School, Ohtawara  
\*\* Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

（連絡先：ym\_ishikawa@cc.utsunomiya-u.ac.jp）

(2) 調査方法及び調査期間

Google フォームを用いたアンケートを、2022年12月19日～2023年1月27日の期間に実施した。

(3) 調査内容 (概要)

①教職員向け

- ・教職経験年数、特別支援学校の教員免許の有無
- ・文字を「書く」、「読む」、「計算をする」ことについて困難を感じる児童の有無とその対応
- ・個別最適な学びの実現を目指す上での取組、課題などについて (自由記述)

②児童向け

- ・文字や文を「読む」こと、「書く」こと、「計算する」ことについての困り感
- ・文字を書くときに1番書きやすい方法について
- ・黒板の文字の見え方について
- ・自分で解けない問題があったらどうするか、国語や算数の学習への取組について

3. 結果と考察

(1) 回収率と回答者の内訳

①教職員について

31名中18名(回収率58.0%)の回答を得た。今回、回答を得られなかった教員の状況も考慮しながら、以下、アンケート結果について考察していく。

まず、回答を得られた教職員の教職経験年数を図1に示す。これによると、経験10年以下の教職員が回答者の45%を占め、急速に若年化が進んでいると考えられる。各学年(3～4学級)に少なくとも1人は教職経験5年以内のスタッフがいる計算になる。

また、特別支援学校の免許を取得している教職員はいなかった。

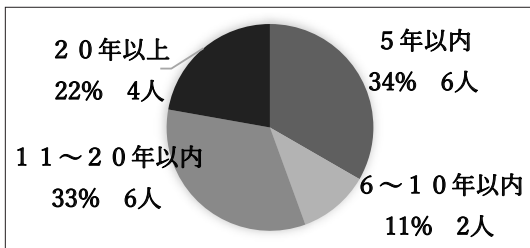


図1 教職経験年数 (回答数: 18)

②児童の学年及び回収人数

児童の回答数について表1に示す。回収人数には、16名の特別支援学級在籍児童も含まれる。

表1 児童の回答数及び回答率 (回収率は概算)

学年	A小学校				
	3年	4年	5年	6年	合計
回収人数(人)	82	94	107	117	400
回収率(%)	80.4	82.5	97.3	97.5	89.7

※例:A小学校3年生の約80.4%にあたる82人が回答した。

(2) 文字や文章を「読む」こと

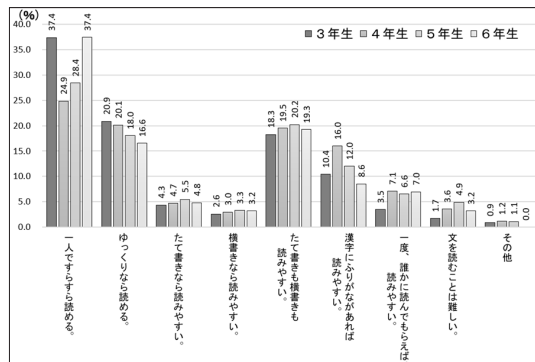
①児童の回答から

教科書の文章の読みやすさ及び今の学年で習う漢字を読むことについての回答を図2、図3に示す。

4年生は他学年よりも読みにくさを感じている回答の割合が高くなった。また、漢字の読みにくさを感じている児童も多かった。この結果と、3・4年生の履修漢字が小学校の学年の中で最も多いことを加味すると、4年生では漢字の読みにつまづきを抱えている児童が多くなると考えられる。読み方が分からない文字が増えてくる児童が多いとするならば、教科書の文や板書を読み上げる配慮が必要である。

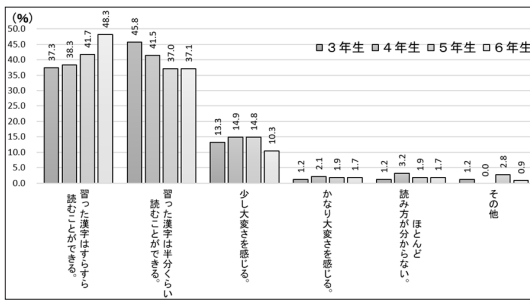
また6年生は、漢字に振り仮名があっても読みにくさを感じている児童も多く、文章を読むことについての個人差が開いてきていると言える。

さらに、縦書き、横書きには学年による大きな人数差はなく、個人の見え方などの事情によるものだと考えられる。



(回答数:3年生115、4年生169、5年生183、6年生187)

図2 教科書の文を「読む」こと



(回答数:3年生83、4年生94、5年生108、6年生116)

図3 今の学年で習う漢字を「読む」こと

## ②教員の回答から

文字を「読む」ことに困難を感じている児童について、半数以上の教員が、読みに困難を抱える児童が学級内に複数人いると回答した。しかし、読み上げ教材やふりがなつき教材の使用は回答数8にとどまり、十分とは言えない数であった。自由記述から、教師が個別に関わることで対応している場合が多いと分かった。これは、支援が必要な児童が複数いる学級が多い現状では、教師一人での対応には限界があると言わざるを得ない。教師が「ルビを振る」には時間がかかってしまうことも課題である。そこで、教科書の読み上げ機能やふりがなつき教材の導入も積極的に取り入れていく必要があると考えられる。

## (3) 文字を「書く」こと

### ①児童の回答から

#### A 習った漢字を「書く」こと

習った漢字を覚えて書くことについて、図4に示す。グラフの帯の色が濃いほど、漢字を覚えて書くことができていることになる。

特に4年生と5年生に漢字の書きに困り感を抱えている児童の割合が高かった。また、全体的に漢字を文章の中で書くことについては難しさを感じている児童が多いことが分かった。学習指導要領では、次の学年で書けるようになることを目指しているので、継続して学習していくことが必要である。

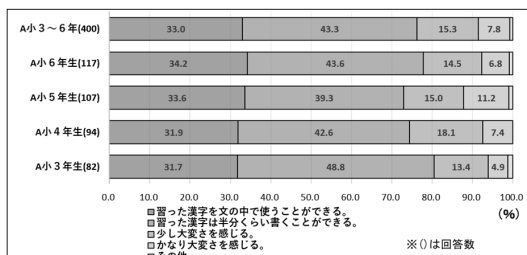


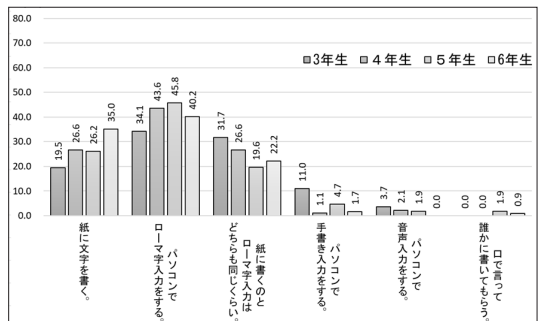
図4 習った漢字を覚えて「書く」こと

## イ 文字を「書く」ときに最も書きやすい方法

学年別の結果を図5に示す。A小学校では全体的に見て、パソコンでも文字入力得意な児童が多いことが分かった。

4年生以上にローマ字入力が得意な児童の割合に大きな差が見られなかった。アンケートは12月から1月に実施したものであり、3年生の後期から4年生の後期までの約1年間で、ローマ字入力のスキルに大きな伸びが期待できるのではないだろうか。訓練すれば、ローマ字入力は4年生程度で十分獲得できる技能であると考えられる。

また、少数ではあるが音声入力や代筆(「口で言って誰かに書いてもらう」)を選んだ児童も各学年に在籍していた。入力ツールの選択肢を教師が複数用意し、一人一人に適したツールを、適した場で活用していくことが重要であると考えられる。



(回答数:3年生82、4年生94、5年生107、6年生117)

図5 文字を書くときに、1番書きやすい方法

## ②教員の回答から

「読む」ことと同様に教員の約半数が、「『書く』ことに困り感を抱える児童が学級内に複数人いる。」と回答した。対応としては、個別対応で書く量を調整している場合が最も多かった。個に応じた必要な対応だと言える。しかし、児童の板書に関する質問では、児童から「量が多い」との回答が多かったことから、ノートの記録などは真に必要なものを厳選していく必要がある。

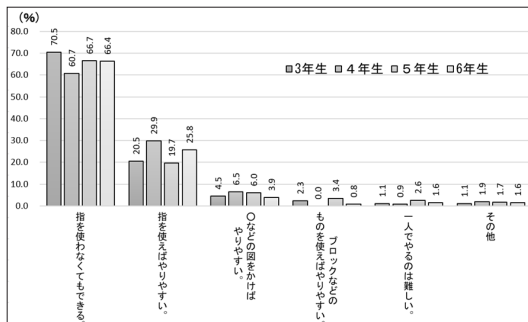
## (4) 「計算する」こと

### ①児童の回答から

#### A 簡単な足し算・引き算(暗算)

学年別の比較(図6)では、どの項目も学年の違いによる大きな差は見られなかったことから、足し算・引き算の暗算力は3年生以上で大きく変化しな

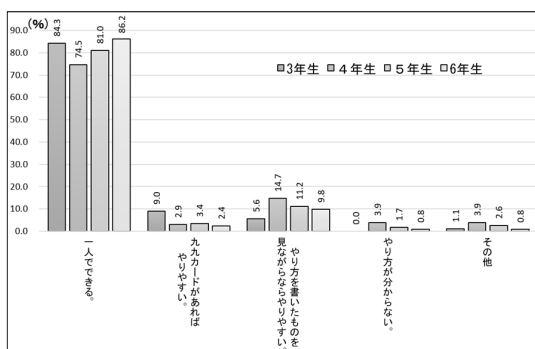
いと言える。「学年が上がれば、暗算でできるようになる。」とは言えないということである。よって、児童が自分の力で足し算・引き算ができるように、一人一人に適した支援ツールを見つけて、活用できるように支援していく必要がある。



(回答数：3年生88、4年生107、5年生117、6年生128)  
図6 簡単な足し算・引き算(暗算)

### イ 掛け算や割り算の筆算

九九カードの使用については、4年生以上の児童からは必要とする児童の割合が3年生の半分以下になっていた(図7)。九九が時間をかけて身に付いてきた場合と、九九カードがあっても筆算できなくなってしまった場合とが考えられる。また、自由記述では、割り算の筆算に、苦手意識を持っている児童が多いことが分かった。教師は児童のつまずきの原因を理解し、適切な支援をしていく必要がある。



(回答数：3年生89、4年生102、5年生116、6年生123)  
図7 掛け算や割り算の筆算

### ②教員の回答から

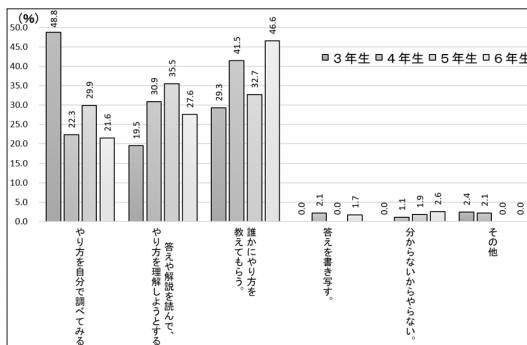
6割を超える教職員が、計算することに困難を抱える児童が学級内に複数いると回答した。効果的な教師の関わりが求められる場面である。

### (5) 学習への児童の取組について

#### ①自分で解けない問題があったとき

やり方を自分で調べたり誰かに聞いたりして取り組むと回答が95%以上を占めた(図8)。学習に対し、すぐにあきらめない児童の姿勢がうかがえる。

そのうち、6割弱の児童が自分で何とかしようとしている実態があった。調べる方法を知らせたり、分かりやすい資料を用意したりすれば、自力で解決できる児童がさらに増えてくると考えられる。



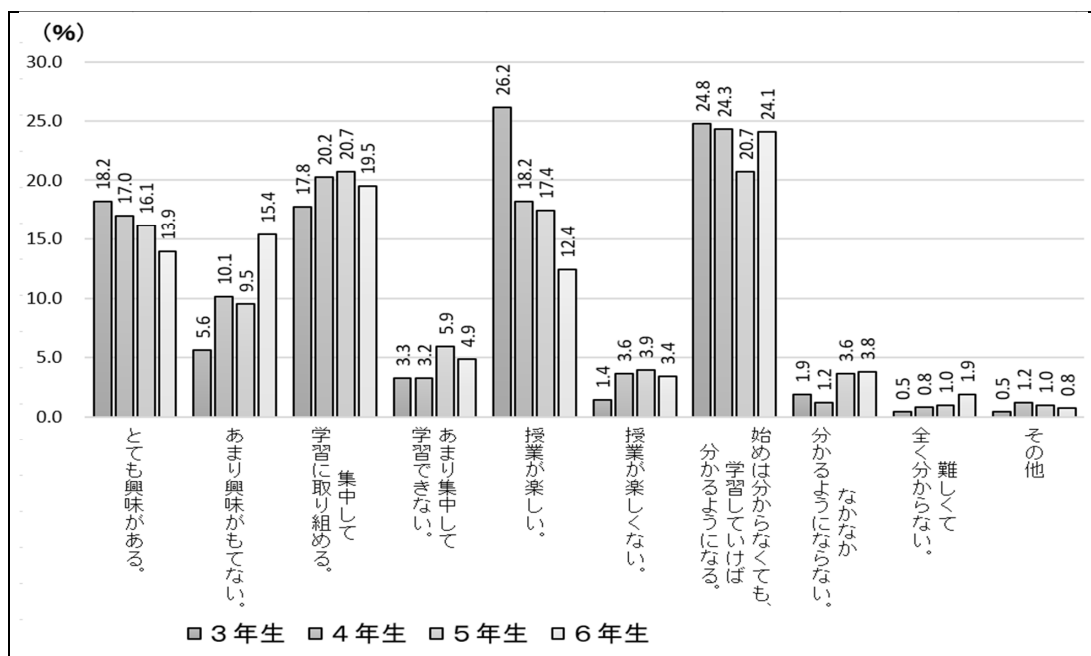
(回答数：3年生82、4年生94、5年生107、6年生116)  
図8 自分で解けない問題があったとき

#### ②国語・算数の学習への取組について

学年ごとのデータを図9に示す。学習内容に「とても興味がある」、「授業が楽しい」のポイントは学年が上がると減少傾向が見られた。また、「なかなか分かるようにならない」、「難しくて全く分からない」のポイントが高学年になると高くなっていった。しかし、「集中できる」かどうかについては、学年による大きな差は見られなかった。

「なかなか分かるようにならない」、「難しくて全く分からない。」の回答を学年別に見ると、4年生よりも5年生で急に割合が増えていた。また「難しくて全く分からない。」の割合は5年生よりも6年生でさらに顕著に増加していた。これは、高学年になると学習内容が高度になるからだと推測されるが、文部科学省(2022)の調査結果とは逆の結果と言える。調査方法が異なるため単純にポイントの比較はできないが、やはり学年上がるほど学習の理解が難しくなってくる児童の割合は増えてくるのではないかと考えられる。

さらに、回答の「その他」の項目における記述では、学年上がるほど、教科によって興味の深さや感じている難易度に差がある傾向が見られた。1つ



(回答数：3年生 257、4年生 196、5年生 204、6年生 124)

図9 国語・算数の学習への取組

の教科でのつまづきを契機に学習そのものが嫌にならないように、自分の得意不得意について理解し、興味関心がある物事などに目を向けていく必要があると考えられる。また、教師も個人の得意なことや専門性を生かして、児童の興味を引き出す授業づくりができることが望ましいと言える。

#### (6) 個別最適な学びの実現に向けての教師の取組

##### ①実際の取組及び工夫点

個別最適な学びの実現のためのこれまでの取組、工夫などについての質問では、やるべきことが児童に伝わりやすくするための工夫が多くなっていた。タイマーを活用した時間の構造化や手順をスモールステップで示し、児童自身に見通しを持たせる工夫などである。また、目標を児童とともに立てることも重要である。他にも多くの取組が現場でなされていると考えられ、上手くいった取組の情報の共有や支援を継続させるための引継ぎが重要である。

##### ②悩みや困り感について

主な課題として次の5点が挙げられた。

- ・人員不足…授業中の支援、子に応じた教材の準備
- ・教材研究に費やす時間、適正であるか判断する専

門的知識の不足

- ・学力が高い児童への支援
- ・家庭との連携・協力
- ・学校での個別指導の時間の確保（授業時間外）

個人差が大きい学級集団の中で、教職員が試行錯誤しながら、日々指導している結果となった。一人一人が自分の学びを充実させていくためには、発問や環境設定の工夫などの授業改善が重要である。

#### 4. 総合考察

児童のアンケートから、高学年になると「授業が分からない、興味が持てない」という回答が急が増えることが分かった。しかし、児童には学年を問わず自分で解決しようとする姿勢が見られることも明らかになった。たとえ学習内容が難しくなっても、児童が主体的に学習に取り組めるような授業改善が急務である。

そして、適切な支援を行うためには、児童のつまづきの原因を理解することがまず重要である。一人でも多くの児童が自分の力で学びを進められるような支援ツールを充実させ、学習が得意な児童も苦手な児童も自分のペースで学べる環境が必要である。

しかし、現場では専門的な知識をもった職員が不

足しており、他機関との連携も必要である。また、保護者の理解を得ることが難しいケースもあるので、信頼関係づくりも今後の課題である。教職員一人一人がアイデアや知識を持ち寄って、自分たちにできる支援を一つ一つ実現させたい。

#### 参考文献

文部科学省中央教育審議会（2021）「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）概要．2021年1月、1-4．（2023年3月1日閲覧）  
[https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt\\_syoto02-000012321\\_1-4.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_1-4.pdf)

文部科学省初等中等教育局特別支援教育課（2022）通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について．2022年12月、26-27．（2023年2月1日閲覧）  
[https://www.mext.go.jp/content/20221208-mext-tokubetu01-000026255\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20221208-mext-tokubetu01-000026255_01.pdf)

#### 謝辞

御多忙中、本研究にご協力いただきました学校の皆様、先生方に心より感謝申し上げます。

2023年3月31日 受理





The Current Status and Issues of Learning Support  
That Elementary School Students Need  
—From The Results of a Questionnair Survey  
of School Children and Teachers—

Aya NAKAMURA, Yumiko ISHIKAWA